

組織登録からみた広島県における卵巣腫瘍の実態

西 信雄^{*1} 杉山裕美^{*1} 笠置文善^{*1} 片山博昭^{*1} 児玉和紀^{*1}
 万代光一^{*2} 有田健一^{*2} 鎌田七男^{*2} 安井 弥^{*2}

1. はじめに

広島県腫瘍登録事業(いわゆる組織登録)は広島県医師会を実施主体として1973年から実施されている。地域がん登録に必要な病理診断名の把握に不可欠な存在になっている。なお本事業は2005年4月の個人情報保護法の全面施行にあわせて、広島県が実施主体である広島県地域がん登録事業と一体化した。

今回我々は、卵巣腫瘍の実態について、広島県腫瘍登録のデータをもとに解析したので結果を報告する。

2. 対象と方法

広島県腫瘍登録は広島県内の医療機関60施設の協力を得て、良性腫瘍・悪性腫瘍(血液疾患も含む)の病理組織に関する資料を収集している。病理診断は病理医が症例を再確認して、国際疾病分類腫瘍学第3版をもとに部位と組織診断をコード化している。

今回我々は卵巣腫瘍の登録例について、登録数・登録率を検討した。なお広島県腫瘍登録は、一般の地域がん登録とは異なるため、届出された組織の集計については、「登録数」、「登録率(人口10万対)」と表現する。

3. 結果と考察

1) 新規に登録された卵巣腫瘍登録数の年次

推移

1973年から2001年の間に新規に登録された卵巣腫瘍は計14,119例であった。そのうち、良性腫瘍が11,079例、境界悪性腫瘍が359例、悪性腫瘍が2,681例であった。これらを年代別にみると、全体に1990年頃まで増加し、良性腫瘍と悪性腫瘍については1990年代以降も増加傾向がみられた。登録数の増加の背景には、超音波検査、CT、MRIの普及、腫瘍マーカーの応用、検診の成果による発見動機の増加が大きく影響していると推定される。

2) 年齢階級別にみた卵巣腫瘍の登録数

良性腫瘍では、30歳代前後の若年層にピークがみられた。悪性腫瘍は50歳代をピークとしていた。境界悪性腫瘍は年齢層の上でも両者の中間帯に位置していた。卵巣腫瘍の年齢分布は国内外の報告にみられると同様の傾向を示していた。

3) 年齢階級別にみた卵巣腫瘍登録数の年次推移

良性腫瘍では、20歳代から70歳代までほぼすべての年齢階級で増加傾向がみられ、特に20歳代から40歳代までの登録数の増加が著しかった。悪性腫瘍では、30歳代から80歳代まで幅広い年齢階級で登録数の増加傾向がみられ、特に40歳代から70歳代まで増加傾向が強かった。

4) 卵巣腫瘍の年次別にみた年齢階級別登録数および登録率

^{*1}放射線影響研究所 〒732-0815 広島県広島市南区比治山公園 5-2

^{*2}広島県腫瘍登録実務委員会

良性腫瘍の登録率はいずれの年次においても 20 歳代から 40 歳代をピークとし、悪性腫瘍はいずれの年次においても 50 歳代から 60 歳代をピークとしていた。

5) 卵巣腫瘍の性状別にみた左右別登録数

左右別の登録は 4 割近くが不詳であった。良性、境界悪性、悪性いずれも左右ほぼ同数が登録されていた。両側性の割合は、良性 (1.3%)、境界悪性 (1.2%)、悪性 (3.3%) であった。

6) 卵巣腫瘍の組織型分類割合

組織学的分類は ICD-O の性状コードにより良性 (/0)、境界悪性 (/1)、悪性 (/3) に大別した。良性腫瘍では、良性奇形腫＋皮様嚢胞 (54.3%) が半数を占め、その次に粘液性嚢胞腺腫 (20.6%)、漿液性嚢胞腺腫 (12.7%) が多くみられた。境界悪性腫瘍では、粘液性嚢胞腫瘍、境界悪性 (49.6%) が半数を占め、次いで漿液性嚢胞腫瘍、境界悪性 (18.7%)、顆粒膜細胞腫 (15.6%) が続いた。悪性腫瘍では、漿液性嚢胞腺がん (36.2%) と粘液性嚢胞腺がん (22.2%) とで過半数を占め、次いで類内膜腺がん (9.3%)、明細胞腺がん (8.4%)、腺がん NOS (7.3%) が続き、これら表層上皮性・間質性腫瘍が 80%以上を占めた。良性と境界悪性では粘液性腫瘍が漿液性腫瘍を上回っていたが、悪性になるとこの順位が逆転した。組織型別頻度は国内外の報告にみられると同様の傾向を示していた。

7) 良性卵巣腫瘍の主要組織型別登録数の年次推移

良性腫瘍の 3 大組織型 (良性奇形腫、粘液性嚢胞腺腫、漿液性嚢胞腺腫) のうち、特に良性奇形腫の登録数が増加していた。

8) 悪性卵巣腫瘍の主要組織型別登録数の年次推移

悪性腫瘍の 4 大組織型 (漿液性嚢胞腺がん、粘液性嚢胞腺がん、類内膜腺がん、明

細胞腺がん) のうち、特に漿液性嚢胞腺がんと粘液性嚢胞腺がんの登録数が増加する傾向がみられた。

9) 年齢階級別にみた良性卵巣腫瘍の主要組織型別登録数

良性腫瘍の 3 大組織型のうち、良性奇形腫のピークが 20 歳代～30 歳代であったが、粘液性嚢胞腺腫や漿液性嚢胞腺腫では 40 歳代にピークがみられた。

10) 年齢階級別にみた悪性卵巣腫瘍の主要組織型別登録数

悪性腫瘍の 4 大組織型である漿液性嚢胞腺がん、粘液性嚢胞腺がん、類内膜腺がん、明細胞腺がんのピークはいずれも 50 歳代にあった。

11) 転移性卵巣腫瘍の原発部位

採取部位が卵巣であって臨床情報および組織学的所見にて転移と診断されたが、その原発臓器については採取されていない症例を転移性卵巣腫瘍として登録している。登録数 115 例の解析では、原発部位として胃 (42.6%) が最も多く、次いで結腸 (7.8%)、直腸 (2.6%)、乳房 (2.6%) であった。なお、原発部位不明は 35.7%であった。

4. 結語

広島県腫瘍登録の資料をもとに、1973 年から 2001 年の卵巣腫瘍の症例について解析した。良性腫瘍も含めて全体に増加傾向にあること、年齢のピークは良性腫瘍より悪性腫瘍のほうが約 20 歳高いことなどが明らかとなった。今後も登録を継続し、卵巣腫瘍の登録数の推移について観察を続ける必要がある。